

仲間と共に踏み出す「自分の一歩」

令和4年度

国立妙高青少年自然の家 文部科学省委託事業

チャレンジ キャンプ

報告書

2022

〈統合型長期キャンプ〉

未



独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立妙高青少年自然の家

令和4年度 国立妙高青少年自然の家 文部科学省委託事業

主催:独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立妙高青少年自然の家

後援:新潟県教育委員会 妙高市教育委員会 上越市教育委員会 糸魚川市教育委員会

仲間と共に踏み出す「自分の一歩」



概要

このキャンプは、海や山が近い妙高青少年自然の家を立地とし、海から山へと100kmの道のりを自分の力で踏破するキャンプである。「歩く」活動をメインとして移動しながら、9日間で野外炊事、テント泊、カヤックなどの様々な活動にチャレンジする。また、統合型キャンプとして、一人一人が自己を見つめ、他者と協働しながら課題に立ち向かうことで自己肯定感を育み、これからの生活につながる「自分の一歩」を踏み出す後押しをすることを目指して実施した。統合型キャンプとは、心理的な課題や発達障害などを含む様々な個性や特性をもつ子供たちが、性別や障害の有無に関係なく、自然への挑戦や他者との協働を通して、成長し合うことを目指したインクルーシブなキャンプである。

ねらい

このキャンプを通して、一人一人が自己を見つめ、他者と協働しながら課題に立ち向かうことで、自己肯定感を育むことをねらいとする。

このキャンプでは、自己肯定感を次の2点として捉える。

- 自己を見つめ、自分の長所と短所、自信のあるところないところの両方を受容し、体験をもとに、自らの成長を振り返り、自分を好きになること。
- 他者とのかかわりを通じて、他者の感性や考え方に触れ、理解したり、他者から学んだりして、自らを高めていくこと。

実践研究事業

独立行政法人国立青少年教育振興機構の教育事業等方針により、青少年の健やかな成長と自立を推進するため、モデル的事業を実施している。チャレンジキャンプ 2022 は、これまで妙高青少年自然の家が行ってきた長期キャンプのノウハウを生かし、スーパーバイザーである筑波大学教授 坂本昭裕先生、同大学特任助教 大友あかね先生のご指導のもと、「自己肯定感を高める」ことをテーマに行った実践研究事業の2年目である。キャンプ中に見られる子供たちの言動や記述から分析を行った質的分析 (P.10 ~ 13) と、事前キャンプ、本キャンプ、キャンプ後のアンケートを分析した量的分析 (P.14 ~ 17) をもとに、本事業における成果と課題について考察を行った。



CONTENTS

● 目次

P. 2-3	概要 ねらい 行程表
P. 4-5	準備のステージ 出会いのステージ
P. 6-7	協力のステージ 自立のステージ
P. 8-9	挑戦のステージ 未来につなげるステージ
P.10-11	チャレンジキャンプ2022 成果1 Aさんの変容
P.12-13	チャレンジキャンプ2022 成果2 Bさんの変容
P.14-15	チャレンジキャンプ2022 成果3 自己肯定感尺度調査
P.16-17	チャレンジキャンプ2022 成果4 個人志向性・社会志向性尺度調査
P.18-19	特別寄稿 謝辞

● 期 日

事前キャンプ
令和4年7月9日(土)～10日(日)
本キャンプ
令和4年7月30日(土)～8月7日(日)

● 参加者

小学5年生～中学3年生までの12名
(心理的な課題や発達障害などを含む様々な個性や特性をもつ参加者が数名)

● グループ編成

1グループ6名の2グループ
(各グループにチーフカウンセラーとサブカウンセラーのスタッフが1名ずつ同行)

● 常同スタッフ

国立妙高青少年自然の家の職員3名
学生スタッフ3名
スーパーバイザー1名(筑波大学特任助教)
※スーパーバイザー兼臨床心理士1名(筑波大学教授)は事前キャンプのみ参加
※その他、物資運搬、緊急車両などのサポートとして自然の家の職員が複数名

新型コロナウイルス感染症対策及び体調不良者への対応

- ・参加者からの事前健康観察記録表の提出。
- ・キャンプ中、起床後・就寝前の体温チェックとカウンセラーの面談による健康観察の実施。
- ・定員4名のテント1つにつき1人での宿泊。
- ・原則マスク着用。状況によりマスクを外して活動する場合は、十分な距離の確保、活動の前後で手指等の消毒を行う。
- ・体調不良者が出た場合、発熱及び症状の状況を見て、保護者連絡、医療機関への受診、さらには、キャンプ全体を中止にする判断を行う。

ステージ(日にち)		主な活動内容
事前キャンプ	準備のステージ	7/9(土) 全体会・テント設営・野外炊事 7/10(日) 藤巻山登山・全体会
	出会いのステージ	7/30(土) 開会式・歩き(船見公園～平山キャンプ場)
本キャンプ	協力のステージ	7/31(日) 歩き(平山キャンプ場～自然の家)
		8/1(月) 歩き(自然の家～野尻湖～やすらぎの森キャンプ場)
	自立のステージ	8/2(火) 歩き(やすらぎの森キャンプ場～野尻湖～やすらぎの森キャンプ場) カヤック体験
		8/3(水) 歩き(やすらぎの森キャンプ場～笹ヶ峰)・バックキング
	挑戦のステージ	8/4(木) 歩き(笹ヶ峰～火打山～高谷池ヒュッテ) ※悪天候により火打山登山の途中で下山
		8/5(金) 歩き(高谷池ヒュッテ～火打山～笹ヶ峰)・自動車(笹ヶ峰～自然の家) ※安全確保の点から予定していた妙高山登山から火打山登山に変更
未来につなげるステージ	8/6(土) 片付け・振り返り・ゴールパーティー	
	8/7(日) 閉会式	

準備のステージ

自己肯定感観点

自己を見つめる : 本キャンプに向けた話や体験活動を通して、見通しをもつ。
 他者とのかわり : 初めて知り合った仲間と様々な活動に取り組む。

主な活動内容

- 7/9(土) ・開会式、全体説明会①
 (自己紹介・キャンプについて)
 ・アイスブレイク
 ・グループワーク
 (キャンプにおけるリスク)
 ※保護者はキャンプ説明会に参加
 ・テント設営、シュラフ準備
- 7/10(日) ・テント撤収、シュラフ片付け
 ・藤巻山登山
 ※保護者は自然の家職員と面談
 ・全体説明会②
 (持ち物と服装について)
 ・閉会式

ステージの 重点ポイント

- 子供と保護者の不安や心配を軽減し、本キャンプへの意欲を高める。
- 本キャンプで行う活動を実施し、子供たちに活動の見通しをもたせるとともに、個々の特性やスキルを把握する。
- 子供同士のかかわりを観察し、本キャンプのグループ分けの参考にする。

スタッフの基本姿勢

- 子供たちの緊張が和らぐように、スタッフが積極的にかかわり、笑顔と受容的な態度で接する。
- 活動の基礎知識や技術などを分かりやすく丁寧に伝え、個々の経験や知識を把握しながら、けがのないようにサポートする。
- 活動を通して、様々な参加者とかかわり、人とかかわり方、特性などの理解に努める。

歩 き

- 自然の家の体験プログラムの一つである「藤巻山登山(全長約7.6km)」を実施。
- 全体を2グループに分け、スタッフを先頭・真ん中・最後尾に配置する。
- 歩くペース、休憩回数などは、スタッフがリードする。

野外炊事(夕食)

- 参加者と保護者が分かれて調理をする。
- ファイルに綴じたレシピを提示し、それを見ながら作り方を確認したり、役割を決めたりできるようにする。

宿 泊

- 2家族が、参加者2人(組)、保護者2人(組)に分かれて、2張のテントを設営する。
- 宿泊は家族ごとでテント泊をする。



キャンプにはどんなリスクがあるのかな?



本キャンプでつける名札も自分で木を切って作ります

アイスブレイクで緊張をほぐそう

夫と子供、2人ずつに分かれてテントを設営



カレーづくりの役割分担はどうしようか?

おいしそうにできた!!

本キャンプもがんばろう!!



945mの藤巻山山頂に登頂

翌日の登山に向けての夜ミーティング



1日目

出合いのステージ

自己肯定感観点

自己を見つける : キャンプ生活の基本的な生活習慣を身に付け、本キャンプにおける自分なりの目標をもつ。
 他者とのかわり : グループに必要な役割を決めたり、自分の役割を果たしたりする。

主な活動内容

- 7/30(土) ・開会式
- ・歩き
(船見公園～平山キャンプ場
約13km)
- ・野外炊事(夕食)
- ・全体ミーティング
- ・アンケート
- ・テント泊

ステージの 重点ポイント

- 安心してキャンプを進められるように、全体の約束事や活動時のマナーづくり、受容的な雰囲気などのキャンプの枠組みを作る。
- 個々の緊張を和らげ、グループ内でお互いのかかわりが生まれるような仕掛けをつくる。

スタッフの基本姿勢

- 安心して活動できる環境づくりに努める。
- グループの合意形成の場面では、お互いの考えや特性を尊重したり、前向きに捉えたりできるように、意図的にグループに介入する。
- 声かけや振り返りシートを通して、受容的な態度で接し、一人一人の良い面、頑張っている面に目を向ける。

歩 き

- ルート上にいくつかチェックポイントを設定する。
- チェックポイントに至るまでのルートマップを参加者に提示し、参加者自身がマップを見ながら歩けるようにする。
- スタッフは安全を確保しながら参加者の後方を歩くが、歩くペース、休憩回数などは、スタッフがリードする。

野外炊事(夕食)

- グループごとに調理する。
- 事前キャンプと同様にファイルに綴じたレシピを提示し、それを見ながら作り方を確認したり、役割を決めたりできるようにする。

宿 泊

- 一人1張テントを設営する。

日本海が見渡せる船見公園での開会式



いざ出発!!

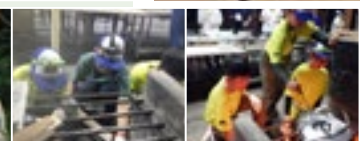


チェックポイントの神社で、キャンプの成功を祈願



仲間と助け合ってテントを設営

食事の準備も自分たちでやります
疲れているけど協力して作りました





2～3日目

協力のステージ

自己肯定感観点

自己を見つめる : 活動の中で、身に付けた知識や技術、失敗を生かして成功体験を重ね、自信をつける。
 他者とのかわり : 様々な活動を通して、グループの仲間とかわり合い、他者を認めながら活動に取り組む。

主な活動内容

- 7/31(日) ・野外炊事(朝食)
 ・歩き
 (平山キャンプ場～
 自然の家 約28km)
 ・野外炊事(夕食)
 ・全体ミーティング、グループ及び
 個人の振り返り
 ・テント泊
- 8/1(月) ・野外炊事(朝食)
 ・歩き
 (自然の家～野尻湖～
 やすらぎの森キャンプ場
 約15.6km)
 ・夕食の買い出し
 ・野外炊事(夕食)
 ・全体ミーティング、グループ及び
 個人の振り返り
 ・テント泊



ステージの 重点ポイント

○一人一人がグループの所属感をもてるようにする。
 ○慣れや個性が出始めることでトラブルが起こっても、心理的に脱落しないように支援する。

スタッフの基本姿勢

○子供たちの様子を見取り、自己決定を大切にしながらも無理をさせすぎないようにする。
 ○一日の流れについて見通しをもたせつつ、時間を意識させて行動を促す。
 ○子供同士で協力して活動し、やり遂げることができるように、スタッフが介入する割合を減らしていく。ただし、子供たちの体調をよく観察し、確実に水分や補食の補給ができるようにする。

歩 き

○スタッフは安全を確保しながら参加者の後方を歩くが、歩くペース、休憩回数などは、スタッフがリードする。
 ○ルートの途中で夕食の食材を購入する活動を設定する。グループメンバーの好みを知ったり、何を購入するか相談したりできるようにする。

野外炊事(朝食・夕食)

○グループごとに調理する。
 ○ファイルに綴じたレシピを提示し、それを見ながら作り方を確認したり、役割を決めたりできるようにする。
 ○夕食の材料を購入させ、自分たちでメニューを工夫できるようにする。

宿 泊

○一人1張テントを設営する。



4～5日目

自立のステージ

自己肯定感観点

自己を見つめる : 活動の中で、自分が助けてほしいことを伝えたり、どのようにしたら問題が解決するかを
考えたりする。
他者とのかわり : 様々な活動を通して、自分らしさを出しながら、グループの中で合意形成を図る。

主な活動内容

- 8/ 2(火) ・野外炊事(朝食)
・歩き(やすらぎの森キャンプ場～野尻湖～やすらぎの森キャンプ場 約5.6km)
・野尻湖でカヤック体験(約3km)
・野外炊事(夕食)
・全体ミーティング、グループ及び個人の振り返り
・テント泊
- 8/ 3(水) ・野外炊事(朝食)
・歩き(やすらぎの森キャンプ場～笹ヶ峰 約18km)
・全体ミーティング、グループ及び個人の振り返り
・バックキング
・スタッフによるおもてなし夕食
・テント泊

ステージの重点ポイント

- 子供同士がお互いの理解を深め、お互いを認め合い、高め合えるようにする。
- グループメンバーで合意形成を図り、解決しながら活動に取り組みさせる。

スタッフの基本姿勢

- 一日の流れについて見通しをもたせつつ、時間を意識させて行動を促し、スタッフの指示を減らす。
- 子供同士で協力して活動し、やり遂げることができるように、スタッフが介入する割合を減らしていく。
- 意見の衝突やトラブルが起きた時には、子供たちがグループの課題としてその問題を捉え、グループで主体的な解決ができるようにする。

歩 き

- スタッフは、グループの様子や見取れる範囲で先頭を子供たちに任せ、できる限り介入しない。

野外炊事(朝食・夕食)

- グループごとに調理する。
- ファイルに綴じたレシピを提示し、それを見ながら作り方を確認したり、役割を決めたりできるようにする。

宿 泊

- 一人1張テントを設営する。



6～7日目

挑戦のステージ

自己肯定感観点

自己を見つめる : 困難な状況においても、自分を信じ、あきらめずに乗り越えていく。

他者とのかわり : グループの仲間と声を掛け合い、助けが必要な場面で適切に仲間を支え、互いに協力して活動に取り組む。

主な活動内容

8/4(木) ・登山(笹ヶ峰～高谷池ヒュッテ～火打山～高谷池ヒュッテ 約10.4km)
・全体ミーティング、グループ及び個人の振り返り
・家族からの手紙

・ヒュッテ泊

※悪天候により火打山登山の途中で下山

8/5(金) ・登山(高谷池ヒュッテ～火打山～高谷池ヒュッテ～笹ヶ峰 約10.4km)

・自動車で自然の家に移動

・全体ミーティング、グループ及び個人の振り返り

※安全確保の点から予定していた妙高山登山から火打山登山に変更

ステージの
重点ポイント

○自信や自己肯定感を高めることができるようにする。

○自分を支える仲間や仲間を支える自分に気付かせるようにする。

スタッフの基本姿勢

○標高の高い山への挑戦となるため、子供たちの健康状態はその都度把握する。

○子供たちが自分を信じて活動に取り組めるように見守る。

○歩くことが困難な状況になった場合、様々なことを想定し、その中から自己決定をして活動に臨ませる。

歩 き

○スタッフは、グループの様子や見取れる範囲で先頭を子供たちに任せ、できる限り介入しない。

○全体の先頭と最後尾にスタッフを配置する。危険箇所については、スタッフがグループの先頭を歩き、十分に安全を確保しながら進む。

野外炊事

○なし

宿 泊

○ヒュッテ泊 (8/4)

○自然の家 スバルホール泊 (8/5)



雨が降る中、火打山山頂を目指します



山頂付近には雪がまだ残っています



ヒュッテでは家族から預かった手紙を子供たちに渡しました



火打山山頂に再チャレンジ



山頂に着いたぞー!!



悪天候のため火打山登山のみとなりましたが、全員が山頂までたどりつき、無事下山することができました



未来につながるステージ

自己肯定感観点

自己を見つめる : 自分の頑張りを見つめ、自分の成長を振り返る。
 他者とのかわり : グループの仲間への感謝の気持ちをもつ。

主な活動内容

- 8/6(土) ・野外炊事(朝食)
 ・片付け
 ・まとめの時間
 ・ゴールパーティー内容検討
 ・ゴールパーティー
 ・全体ミーティング、グループ及び個人の振り返り
- 8/7(日) ・片付け
 ・アンケート
 ・閉会式

ステージの重点ポイント

- 自分の頑張りを振り返ることができるようにする。
- グループの仲間と一緒に活動してきたことを振り返る。

スタッフの基本姿勢

- キャンプの様子や頑張りを想起できるように、画像を印刷したり、具体的なエピソードを伝えたりする。
- 子供たちの主体的な活動を引き出すため、スタッフはできる限り介入しない。

歩 き

○なし

野外炊事(朝食・夕食)

- グループごとに調理する。
- ファイルに綴じたレシピを提示し、それを見ながら作り方を確認したり、役割を決めたりできるようにする。
- ゴールパーティーで食べたいものを相談し、自分たちで調理する。(8/6 夕食)

宿 泊

○自然の家 スバルホール泊(8/6)



Aさんの変容

ここでは、チャレンジキャンプ2022に参加したAさんの事例について、右に示す3つの視点から、キャンプ中におけるAさんの変容について考察した。

- ①本人の視点……活動後の振り返りの記述、発表資料、アンケート、発言
 - ②保護者の視点……保護者から見た活動後の子供の変容
 - ③スタッフの視点……スタッフによる参与観察の記録
- ※参与観察とは、調査者が被調査者の集団の内部で長期にわたって生活し、その実態を多角的に観察する方法

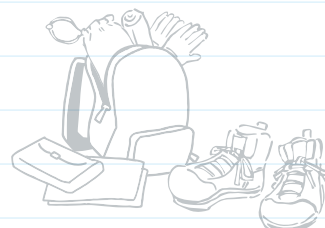
▶ 出会いのステージ

～キャンプへの不安を抱えるAさん～

初日は、約13kmの道のりを歩いた。もともと体力に自信がなかったAさんは、「帰りたい」「絶対100km歩くのは無理」など、序盤から弱音を吐いていた。歩ききった後は、「とても疲れた」「明日にはこれが倍になっちゃうのかと思うと頭が痛い」などと振り返りで記していた。

この日の目的地である「平山キャンプ場」には、予定よりも3時間遅れで到着した。シャワーや夕飯の準備をする場面では、時間がないことを理解しながらも、進んで準備をすることができなかった。特に、シャワーの準備をする場面では、荷物が入っているカバンのどこに何がしまっているのかが分からなかったり、何が必要なのかを考えて選んだりすることが難しかった。

Aさんの振り返りや発言などから、キャンプに対する不安が見受けられた。また、次の活動に向けての準備が進まないことやスタッフに任せる姿が多くあったことから、やるべきことを自分で考え、行動する力がまだ乏しいと感じた。



▶ 協力のステージ

～チャレンジを乗り越えていく中で、自信が付き始めたAさん～

2日目は、初日の2倍以上の道のりを歩いた。この日は日差しが強く、日陰が少ない道のりを長時間歩いた。所々にある給水スポットでは、冷たいタオルや飲料水を支給してくれるスタッフに感謝する姿が多く見られた。振り返りでは、「きちんと歩ききれてとても嬉しいし、驚いている」と記した。全行程の中でもこの日が最も辛かったと語っていたことから、Aさんにとって約28kmを歩ききったことは、大きな達成感や自信を得ることにつながったと考える。

3日目は、野尻湖を目指して約15kmの道のりを歩いた。道中での休憩時間が間延びすることが多々あったことから、時間を管理する役割をつくることになった。話合いの結果Aさんが担当になり、休憩時間を決めたり、出発前に準備を促す声掛けをしたりした。なかなか上手くいかない場面もあったが、役割を果たそうとする姿や、準備に対する自分の行動を見直す姿が見られた。出発の準備が出遅れがちなAさんであったが、見通しをもって行動する場面が増えてきた。重い荷物を運ぶ仲間の手を引いたり、支えたりする姿が見られるなど、グループの中で自分ができることを考え、実践しようとする意識が高まってきたことがうかがえる。



▶ 自立のステージ

～自分の役割を考え、実行するAさん～

4日目のカヤック体験では、パドルの使い方が不慣れだったり、ボートが安定しなかったりで、序盤に船酔いをした。後半の活動に不安を感じている様子であったが、指導員に漕ぎ方を教わり、コツをつかんだからはカヤック体験を楽しんでいるようであった。早く漕げるようになり、最後は3位で岸にゴールできたと嬉しそうにスタッフに語っていた。

この頃から、食事の準備や片付け、テントの設営や撤収などの毎日繰り返し行



われる作業が早くこなせるようになってきた。スタッフの声掛けがなくても、自分から準備をし始めたり、役割を探して仲間と協力して作業を進めたりすることが増えた。努力したことが自分の成長につながっているという実感を得たこと、見直しをもって行動する周りの仲間から影響を受けたことなどが、こういった姿が増えてきた理由として考えられる。集団の中で自分はどの行動すべきかを考え、実行できるようになってきた。



▶ 挑戦のステージ

～自信をつけて、最終チャレンジに挑んだAさん～

6日目はよいよ火打山登山に挑戦。道中では、男女で歩く速度に差が生じてグループが分断したり、Aさんに対する周りからの攻撃的な発言が目立ったりする問題場面が多くあった。仲間への思いやりやそれぞれの言動について考え直す話合いの場を設けた。グループが分断した場面では、Aさんは、後方の女子に励ましの声掛けをしたり、前方の男子に速度を落とすよう声掛けをしたりと、周りを見ながら仲間をサポートする姿があった。また、「途中でばらけることがあったが、みんなでペースを調整して修正できてよかった」「一人でゴールするのはさみしい」「皆でゴールしたい」とスタッフに語っていたことから、グループの仲間と目標を達成しようとする思いの強さがうかがえた。

7日目は、前日の悪天候の影響により妙高山登頂を断念。前日達成できなかった火打山登頂に再チャレンジすることとなった。「妙高山に行きたかったと思えることがすごい。1週間前の自分だったら妙高山に登らなくていいことに喜んでいたら、100km歩けるとはびっくり!! 自信がついた」と妙高山を登り切りたかった思いを振り返っていたことから、困難を乗り越えてきた経験を積み重ねてきたことで、強い自信につながったと考える。



▶ 未来につなげるステージ

～自分の可能性と仲間の大切さを知ったAさん～

8日目は、これまでの活動を一人一人が画用紙にまとめた。キャンプ中の写真を見ながら、様々なチャレンジを通して感じたことを思い返しているようであった。最終日のアンケートでは、「自分のよいところも悪いところもそのままに認めることができる」「まわりから理解されていると思う」などの項目がキャンプ初日と比べて高まっていた。仲間とのかかわりを通し、様々な困難を乗り越えた経験が、Aさん自身も知らなかった自分の一面を知るきっかけになったのではないかと考える。約100kmを踏破できたこと、グループの一員としての役割を考え行動できたことが、Aさんの自己理解や自己肯定感の高まりにつながったと考える。



保護者が感じた成長エピソードより(一部抜粋)

- ◇キャンプから帰って、同じ班の仲間のすてきなところを話してくれた。仲間のよいところをそのまま受け止めてくれたことが嬉しかった。キャンプの中でいろいろなことを助け合って過ごしていくことで、自分の日頃のことと近い体験でなくても、受け止められるようになったのかなと思う。
- ◇「自分で決めるんだ、決めたんだ」と言うことが増えたように思う。できないことに癪癪を起すことが減り、自分でやれるところまでやったら頼ることを考えつくようになった。苦手なことに対し、「自分は〇〇なところがある、こういう理由でできない」など、少し引いた状態で考えることができるようになった。
- ◇「ありがとう」という言葉が増えた。他の人に支えてもらったり、他の人の存在の大切さに気付いたりすることができたのは、大きな変化だと思う。

Bさんの変容

ここでは、毎日の振り返りシートをもとに、キャンプ中の姿や会話などから、スタッフが見取ったBさんの変容について考察した。

1日目 がんばりたいけど戸惑うBさん

グループの先頭を歩き、チェックポイントに向かったが、地図の見方がよく分からず、仲間に助けってもらった。また、途中ルートを外れ、チェックポイントに立ち寄れなかったことをとても気にしていた。謝りたい気持ちとできなかったくやしさをややもやし、仲間へ謝る言葉も強い口調となっていた。それでも、誰も自分を責めないことに驚いたとカウンセラーに話していた。キャンプ場では、テントに一人で泊まることに不安を感じており、何度もカウンセラーを呼ぶ姿が見られた。



つらさ	●●●○
達成感	●●●○
楽しさ	●●●○

振り返りシート

どんな1日だったか(出来事、感じたこと、思ったこと)を振り返り、文章、イラストなどでまとめた。つかれ度、達成感、〇〇度(自分で考えていい)の3つを数値化し、自分を振り返る手立てとした。

2日目 仲間の優しさに気付くBさん

約28kmの道のりを歩く日。日陰がない農道をカウンセラーから日傘を借りて歩く。夏の暑さ、疲れから立ち止まることが多くなる。仲間も疲れているが、Bさんを急かすことなく待ってくれたと仲間の優しさに気付いた。テント設営では、みんなより行動が遅れることがあり、不安な気持ちになる。また、一人のテント泊が続く。「慣れた方がいいかな」と振り返りシートに書いていた。

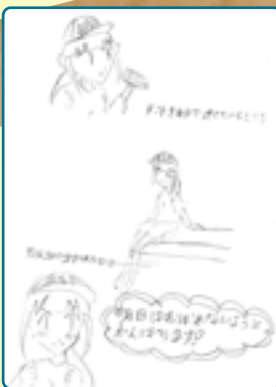


つらさ	●●●○
達成感	●●●○
楽しさ	●●●○

3日目 みんなと同じ体験をする楽しさを実感するBさん

野尻湖に到着すると、他の子が湖に足を入れ始めた。Bさんは、しばらく様子をつかっていた後、湖に足をつけた。水の気持ちよさと、みんなと同じ体験をする楽しさを感じていた。

夕食づくりの際に、指をけがしてしまう。止血の間、けがをしてしまったことに対する落ち込みとみんなの優しさに対する感謝の言葉が何度も出てきた。この日の夕食は、スーパーで買い出しをして作ったオリジナルカレー。みんなと食べるができないことが一番つらいと話す。通院後に、夜遅くなったが、無事にカレーを食べることができ、とても安堵していた。



つらさ	●●●○
達成感	●●●○
楽しさ	●●●○

4日目 初めてのことを乗り越えるBさん

初めてのカヤック体験。カヤックの乗り方が分かり、慣れてくると、楽しんで活動していた。みんなから遅れると不安な気持ちを口にしますが、インストラクターが程よい距離感でBさんとかかわったことで、目的地の島まであきらめずに漕ぐことができた。みんなと楽しく水遊びもしていた。



つらさ	●●●○
達成感	●●●○
楽しさ	●●●○

6日目 くやしいけれど、みんなとなら安心なBさん

雨が降る中、登山開始。途中足どりが重くなるところもあったが、みんなに励まされゆっくり進んだ。急な岩場をひよひよいと進み、みんなを驚かせることもあった。前日はできなかったしりとりをみんなですることができ、喜んでいった。

天候が悪化し、火打山山頂の目前で下山。「とてもくやしかったが、みんなと安全にいられたことがよかった」と振り返りで話した。

バックキングを最小限にしたことで、着替えが足りずパニックとなったが、着替えがない人が他にもいることが分かり、自分だけではないのだと安心していった。

7日目 みんなと一緒に達成感を味わう

前日登ることができなかった火打山に再挑戦。みんなと一緒に登り、みんなと一緒に山頂からの景色を眺め、これまでのルートを振り返った。達成感を味わい、記念撮影。「くやしい度Max」から「うれしかった度Max」に変わった。



8日目 自分の成長を振り返る

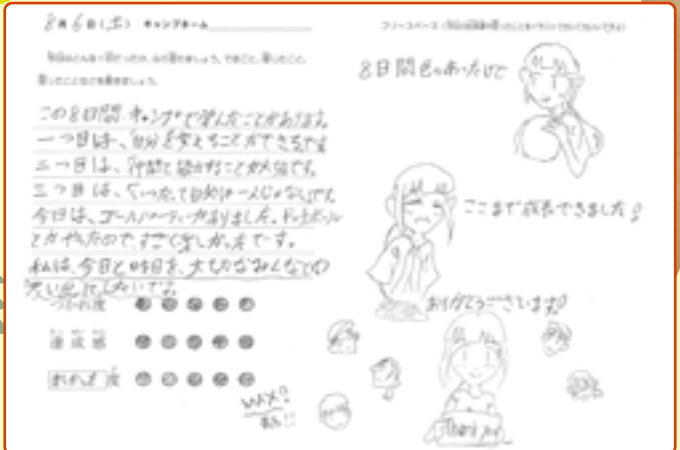
キャンプ中の写真をもとに、キャンプを振り返り、その時の気持ちやがんばり、自分の成長について画用紙にまとめた。色やレイアウトを工夫しながら4枚も書いた。

ゴールパーティーでは、みんなで楽しくドッジボールをしていた。焚火を囲みながら、このキャンプを通して自分が成長したこと、優しい仲間がいたから乗り越えられたことについて語った。「このキャンプに参加しなかったら自分は変わらずにそのままだった」と振り返っていた。この日の振り返りシートには、初めてグループの仲間一人一人のイラストが登場した。

5日目 みんなと同じペースで歩くBさん

長い登り坂が続く。キャンプ初日から比べて、体力がつき、みんなと同じペースで歩く自分の成長を感じたことを振り返りに書いていた。

休みたい時は、優しい口調で仲間に伝える姿が見られた。グループでしりとりをしているのを見て、「入れて」と話す。ただ、途中からの参加で難しかったのか、しりとりは続かなかった。



9日目 自分の一歩を踏み出せたBさん

閉会式。家族の前で「不安になった時もあるが、私は一人じゃないと思えた。人にも優しくできたし、体力がついたから自分は成長できた。自分の一歩を踏み出せた」と、堂々と話す姿が見られた。

当初、「仲間とトラブルになりたくない」「迷惑を掛けたくない」という思いが強かった。振り返りシートの自分で考える〇〇度を「がんばり度」と設定し、日々の自分の行動を振り返る姿にもその思いが表れていた。そんなBさんが、キャンプが進むにつれ、疲れて歩くのに時間がかかった時、失敗してしまった時でも、自分を責めずに優しく接してくれる仲間の存在に気付くようになっていった。そして、そのような仲間と様々なチャレンジを共に乗り越える嬉しさや、一緒にいるという安心感を感じるようにならなくなっていった。また、長距離を歩くことで、体力もついてきて、登山中には仲間との会話を楽しむ姿も見られるようになった。

キャンプ最終日には、振り返りとして「自分の成長」「仲間への感謝」「自分は一人ではない」ことを、自分の言葉で語った。それまで毎回、がんばった自分の似顔絵が登場していた振り返りシートにも、最終日にはグループの仲間一人一人の似顔絵が描かれていたことから、仲間の存在の大きさが伝わってきた。

自己肯定感尺度調査(チャレンジキャンプ2021・2022)

1 調査の概要

自己肯定感尺度とは、「自分が自分をどう見ているか」という感情を測る尺度であり、上位指標として「対自己的領域」と「対他者の領域」からなる。チャレンジキャンプでは、自己肯定感尺度(平石(1990)自己肯定意識尺度を参加者にも分かる表現に一部改変)の質問用紙を用意し、「あてはまる(5点)」「どちらかといえばあてはまる(4点)」「どちらともいえない(3点)」「どちらかといえばあてはまらない(2点)」「あてはまらない(1点)」の5件法で回答を求めた。調査は、事前キャンプ(Pre)、本キャンプ終了時(Post1)、事業終了1か月後(Post2)の合計3回行った。

自己肯定感尺度質問項目(28項目)

対自己領域	意欲	自分の夢をかなえようと意欲に燃えている
	意欲	情熱をもって何かにとりこんでいる
	意欲	自分の良い面をいっしょうけんめい伸ばそうとしている
	意欲	やる気が持てない
	自己受容	自分なりの個性を大切にしている
	自己受容	自分の個性をすなおに受け入れている
	自己受容	自分を見失うことなく自分の道を進んでいる
	自己受容	わだかまりがなく、スカッとしている
	自信	やれば何かできるというそんな自信がある
	自信	自分のよいところも悪いところもありのままに認めることができる
	自信	自分にはよい面が全然ない
	自信	自分には他人に負けないと思える部分がある
	充実感	すごく楽しいと感じる
	充実感	気持ちの面では楽な気分である
	充実感	満足していない
	充実感	好きなことにうちこめている

対他者領域	自己表明・対人的積極性	人前でもありのままの自分をだせる
	自己表明・対人的積極性	友だちをすぐにつくれる
	自己表明・対人的積極性	自分から友だちに話しかけていく
	自己表明・対人的積極性	疑問だと感じたらそれをどうどうと言える
	自己閉鎖性・人間不信	自分はひとりぼっちだと感じる
	自己閉鎖性・人間不信	人とのつきあいをめんどくさいと感じる
	自己閉鎖性・人間不信	他人に対して優しくできない
	自己閉鎖性・人間不信	友だちと一緒にいてもどこかさびしく悲しい
	被評価意識・対人緊張	人に対して、自分のイメージを悪くしないかとおそれている
	被評価意識・対人緊張	人から何か言われぬか、変な目で見られぬかと気にしている
被評価意識・対人緊張	自分は他人より負けているか勝っているかを気にしている	
被評価意識・対人緊張	人に気をつかいすぎてつかれる	

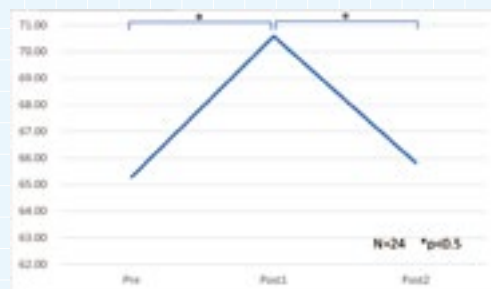
※色付きの項目は、反転項目

2 2年間を通した分析

チャレンジキャンプ2021、2022の2年間の参加者24名について、領域ごとに得点を算出し、一要因分散分析を行った。

(1) 対自己領域

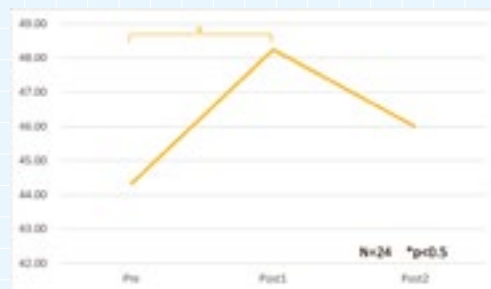
対自己領域を分析した結果、1%水準で有意差が認められた($F(2,46)=6.71, p<0.01$)。多重比較の結果、事前キャンプ(Pre)と本キャンプ終了時(Post1)を比べて、本キャンプ終了時(Post1)の得点が有意に高い結果となった。マウンテンバイクや徒歩による長距離移動、メガサップやカヤック、シャワークライミングなどの経験したことがない活動、火打山・妙高山登山など困難とも思えるチャレンジを乗り越えるたびに達成感や充実感を得て、本人の自信につながったことが要因と考えられる。



Pre		Post1		Post2	
平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
65.29	8.38	70.58	9.40	65.83	9.77

(2) 対他者領域

対他者領域を分析した結果、5%水準で有意差が認められた($F(2,46)=3.25, p<0.05$)。多重比較の結果、事前キャンプ(Pre)と本キャンプ終了時(Post1)を比べて、本キャンプ終了時(Post1)の得点が有意に高い結果となった。キャンプ中の様々な活動を通して、グループの仲間とかかわり、話し合ったり、励まし合ったりして、一緒に乗り越えていくことで、仲間のよさを感じるとともに、安心できる居場所ができたことが要因と考えられる。

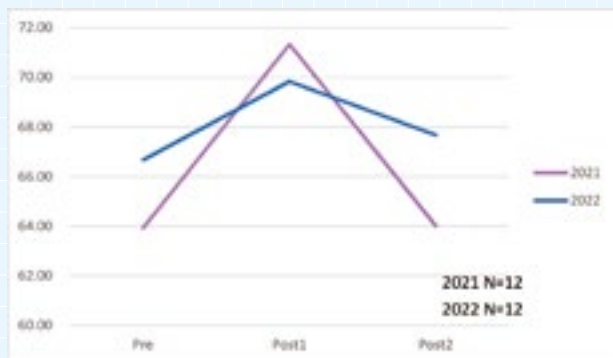


Pre		Post1		Post2	
平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
44.33	7.71	48.25	8.82	46.00	8.11

3 チャレンジキャンプ2021と2022の比較

チャレンジキャンプ 2021、2022 の領域ごとに算出した得点の変化を比較した。

〈対自己領域〉



〈対他者領域〉



2021 及び 2022 で、対自己領域、対他者領域ともに、Pre から Post 1（キャンプ事前から事後）へ向上していると捉えられる（前述 ②の結果同様）。しかしながら 2021 では、Post 1から Post2（キャンプ終了直後からキャンプ終了1か月後）へは Pre と同水準まで低下している。キャンプで高まった自己肯定感が日常に戻った際にも継続できるようにすることを課題と捉え、2022 では、以下の視点でプログラムを考え直した。

参加者が自主的にキャンプに参加できるように工夫する。

- 「歩き」をメインの活動とする。キャンプ初日から参加者が先頭を歩くことができる。
- 主体的に「野外炊事」を進めることができるよう、提示の仕方・メニュー内容を工夫する。また自分たちで食材の購入をする日を設定する。
- ゴールパーティーを企画運営する。

じっくりと振り返る時間を設定する。

- 活動後の振り返りでは、各グループで「今日の活動はどうだったか。」を自由に話せるようにする。
- 個人の振り返りシートを工夫し、文章、達成度、イラスト等で、自己のがんばり、成長についての気付きを促す。
- キャンプを振り返り、写真をもとに自分のがんばりや気持ち、成長についてまとめる。まとめた成果物は、閉会式で家族に紹介する。

その結果 2022 では 2021 と比べ、約 1 か月後の低下は少なくなっている。上記のような手立てが有効であったと考える。

4 次年度への課題

2021 と 2022 のキャンプ直後の自己肯定感を比較すると、2022 が若干低くなっている（分析処理では有意差は認められなかった）。より達成感を感じ、自己肯定感を高める工夫やプログラムの内容を検討していく。

国立妙高青少年自然の家 村松・反町

個人志向性・社会志向性尺度調査

1 調査の概要

個人志向性・社会志向性尺度（伊藤 1993 を一部修正）は、発達の 2 側面である自分独自の基準を尊重し個性をいかした生き方への志向性である「個人志向性」と、他者あるいは社会の規範に則った生き方への志向性である「社会志向性」を捉える尺度である。質問項目に対して、「あてはまらない（1点）」～「あてはまる（5点）」の 5 件法で回答を求めた。調査は、事前キャンプ（Pre）、本キャンプ終了時（Post1）、事業終了 1 か月後（Post2）の合計 3 回行った。

【個人志向性因子】 ※は反転項目

- 小さなことも自分ひとりでは決められない ※
- 自分の目標が見つからない ※
- 自分の信念に基づいて生きている
- 周りとは反対でも、自分の正しいと思うことは主張できる
- 自分が本当に何をやりたいのかわからない ※

【社会志向性因子】

- 人に対しては誠実であるように心掛けている
- 周りとの調和を重んじている
- 社会のルールに従って生きていると思う
- 社会(周りの人)のために役に立つ人間になりたい
- 人とのつながりを大切にしている

2 2022年度参加者の個人志向性・社会志向性得点の変化

2022 年度の参加者 12 名を対象に、因子ごとに得点を算出し、キャンプの時期における得点の変化について、一要因分散分析を行った。その結果、社会志向性因子においては 5%水準で有意差が認められた ($F(2,22) = 4.49, p < 0.05$) (図 1)。多重比較の結果、キャンプ最終日 (Post1) の得点が、事前キャンプ (Pre) よりも有意に高い結果となった。個人志向性因子については、キャンプ前後での変化は認められなかった。

社会志向性因子は、仲間とのつながりや、調和への認識に関する因子である。2022 年度のキャンプ参加者は、歩くプログラムの中で、グループの仲間との会話や関わりを通して、仲間社会への規範を高めていったと考えられる。一方で、個人志向性因子については、キャンプを通じて変化は見られなかった。本年度のキャンプは 100km 歩くプログラムを中心に、ある程度の忍耐を要するプログラムであった。参加児童生徒は、プログラム内容を了解した上で自らキャンプに申し込んできている者が多く、自己決定、目標意識が元々高かった可能性がある。

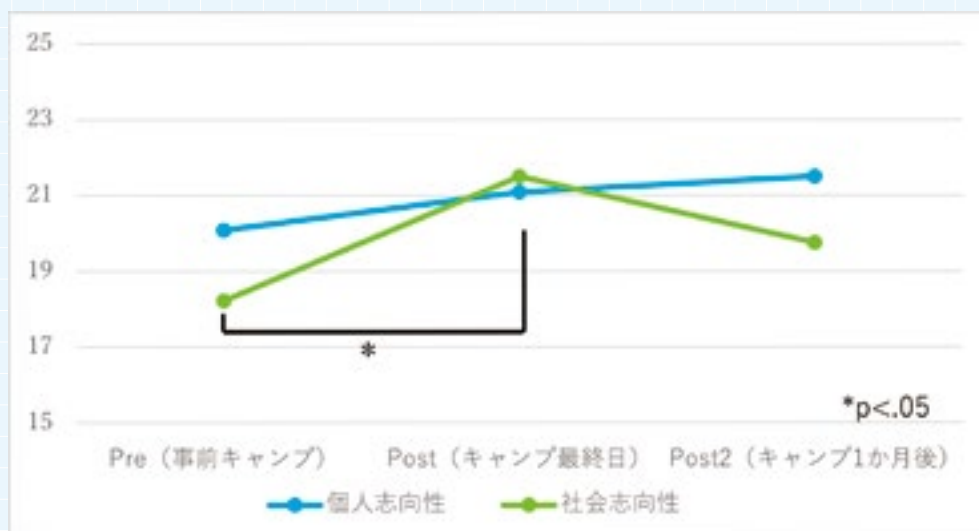


図1 2022年度参加者の尺度得点の変化

3 2021年度・2022年度参加者の個人志向性・社会志向性得点の比較

つづいて、2021年度参加者12名と、2022年度参加者12名を比較するため、群と時期について2要混合計画による分散分析を行った(表1)。その結果、社会志向性因子においては交互作用に有意傾向($F(2,44)=3.08, p<.10$)が認められたため、単純主効果の検定を行った。Preにおいて2021年度参加者が2022年度参加者よりも高い値を示した(図3)。時期については、2022年度参加者において、PreよりもPost1が有意に高い値を示した。個人性因子においては交互作用が有意ではなく、時期の主効果が有意傾向であった($F(2,44)=3.13, p<.10$)(図2)。

表1 2021年度参加者群(n=12)と2022年度参加者群(n=12)の個人志向性・社会志向性得点の比較

		Pre		Post1		Post2		主効果		交互作用	単純主効果	
		M	SD	M	SD	M	SD	群	時期		群	時期
個人志向性	21年度参加者	18.42	4.31	20.42	3.62	18.25	4.04	1.61 ns	3.13 † Pre < Post1	2.34 ns		
	22年度参加者	20.08	3.90	21.08	3.93	21.50	2.87					
社会志向性	21年度参加者	20.08	1.66	20.00	2.55	19.60	3.20	0.00 ns	2.86 † Pre < Post1	3.08 †	Pre 22 < 21	
	22年度参加者	18.22	2.73	21.50	3.18	19.75	4.23				Pre < Post1	

* $p<.05$ † $p<.10$

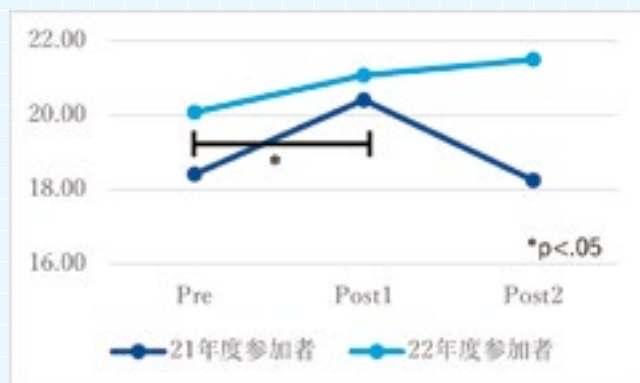


図2 21-22年度参加者の個人志向性得点の比較

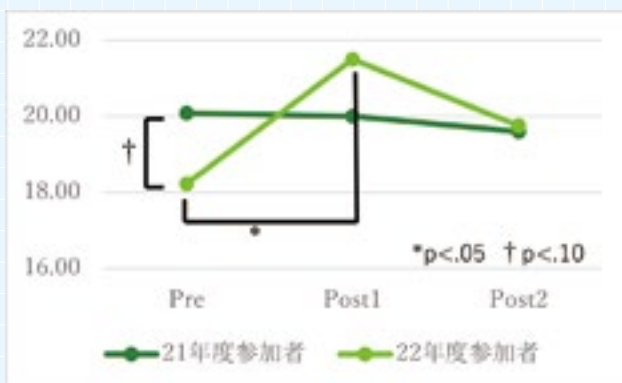


図3 21-22年度参加者の社会志向性得点の比較

2021年度参加者と、2022年度参加者の尺度得点を比較したところ、社会志向性因子で参加年度により得点変化に違いがあり、2022年度のプログラム効果が認められた。その理由としては、2022年度は歩きを中心とした活動にプログラムを変更したこと、最終日にゴールパーティーを実施したこと2点が挙げられる。2021年度の中心プログラムであるマウンテンバイクに比べ、歩くプログラムは移動中のグループでの会話や関わりが増し、また、ゴールパーティーに向けた話し合いでは参加児童らが自分たちで話し合いを進行しパーティーを企画した。このような活動を通して他者との関わりが増加したことにより、周囲の仲間や社会規範(ルール)への認識が高まったものと考えられる。2022年度のプログラムは、2021年度のプログラムと比較して、社会志向性を高めるのに有効であったと言える。個人志向性については、参加年度による効果に有意な差は見られず、全体的にPreからPost1にかけて高まる傾向を示すことが分かった。2021年度、2022年度のプログラムともに、参加児童の個人志向性を高める効果があると言えるだろう。マウンテンバイクや長距離徒歩移動、登山などのチャレンジングな活動を通じて、自信を深め、自分のあり方を肯定的に認識したと考えられる。

以上より、2021年度、2022年度に実施されたチャレンジキャンプは、参加児童の個人志向性、社会志向性という、自己概念の基盤ともいえる志向性(基準の方向性)に影響しうることが示された。このことは、チャレンジキャンプが自分自身の個性を最大限に発揮する自己実現および、良好な社会適応に資する可能性が示されたと言えるだろう。最後に、交互作用ならびに主効果はいずれも有意傾向であり、個人志向性、社会志向性への影響は限定的な可能性も否めない。次年度以降も継続して検討したい。

筑波大学 特任助教 大友あかね



キャンプにおいて 子どもの成長を支援する態度

キャンプに参加する子どもを決めつけないこと

キャンプには、様々な子どもが参加する。不登校の子ども、発達障碍の子ども、あるいは非行などの問題行動を示す子どもなどもある。また、問題行動がないと思っけていても、キャンプが始まるとなにかの課題を示す子どももいる。このときに大切なことは、これら子どもを「決めつけない」態度である。この子は、不登校なので学校へ行っていない。だから、怠学傾向があると決めつけてしまうことがもともいけなないことである。何か問題や課題があるからと決めつけてしまつては、その子は、それ以上に変わりようがなくなつてしまう。

このような様々な子どもにキャンプで出会うときの根本的な態度は、不登校かもしれないし、実は怠学ではないかもしれないし、発達障碍で衝動性が強く学校ですぐに暴力をふるっているけども、もしかするとそうでないかもしれないと、両面を合わせて見るができることである。これは逆もしかりである。良い子かもしれないが、悪い面も持ち合わせているかもしれない。だから大切なことは、より広い視野をもって子ども達に会つてゆくことである。すなわち子どもの可能性に開かれていることが必要なのである。しかしこのことは、案外難しいことである。人の先入観は、かなり強いものであるからである。事前の情報になるべく振り回されなないで、子どもに接したいものである。

キャンプの振り返りで話を聴くということ

キャンプは、ただ単に計画されたプログラムを子ども達に体験させるだけでは有効ではないであろう。参加した子ども達の体験を通じて感じたことや考えたことについて言葉にしてもらうことが大事である。さらに、その言葉を話し、キャンプカウンセラーやグループの仲間たちに聴いてもらうことが重要である。そのことによって、はじめて子どもの心に変化が生じるのである。

振り返りで言葉を話すということは、単に字面を読むこととは異なっている。言葉を語るということは、言葉にのせて感情がこもっているからである。振り返りで言葉を発した子どもが「話したら心が軽くなつた」「聴いてもらつたら納得した」と感じる

のはそのように感情が込められた言葉を、グループのみんなに受け止めてもらえるからである。キャンプの中で、体験した苦労や成功、あるいは人間関係のごたごたなどの不満は、グループの仲間に聴いてもらうことで変化していくのである。

このときに、キャンプカウンセラーは、子どもの話を聴いて、ついアドバイスや助言をしてしまいたくなる。それがびたつと子どもの心にはまる場合は良いが、ずれが生じる場合がある。また、アドバイスや助言は一見すると問題の解決に早くたどり着くことがあるかもしれないが、子ども自身で解決することを阻んでいるとも言えないだろうか。

キャンプカウンセラーの子どもに対する態度

カール・ロジャーズという有名な臨床心理学者がいた。彼は、人間を対象にするあらゆる職業において、その効果を決定する最も重要な要素は人間関係の質であると述べた。すなわち、キャンプで言えば、子どもとキャンプカウンセラーの関係の質である。そして、その質に影響するのは、カウンセラーの「他者に対する態度」であると指摘したのである。このような態度は、カウンセリングマインドと言われ、対人援助や教育を行う際の指導者の心情、姿勢を指し、子どもの直面する問題行動や精神的苦痛の解決を支援するだけでなく、子ども自身の成長を促すと述べたのである。

つまり先述の通り、キャンプカウンセラーが子ども、あるいはグループの課題や問題に対して解決案を出したり、その問題自体を取り除いたりするのではない。まずは、キャンプカウンセラーが、子どもやグループとの間により望ましい関係を構築することにより、子どもが自らの力を十分に発揮し、自分たちの力で問題を解決していけるようにすることが大切である。また、ロジャーズは、人間は誰でも成長する可能性をもっており、成長、変容するのにふさわしい条件さえ整えば、誰でも成長することができると考えていた。それは、たとえば、子どもは、先生や親、友達に関心をもたれたい、認められたい、尊重されたい、理解されたいという欲求をもつていて、その欲求が満たされると、自分でよりよい方向へ成長していくのである。キャンプも同じであろう。キャンプに参加する子どもたちもきつとそのように思っているはずである。

キャンプカウンセラーには、子どもの成長の力を深く信頼し、あらゆる場で一人一人に関心をもち、認め、尊重し、理解しようとする態度や姿勢が求められる。このようなカウンセラーの態度に支えられて、子どもは徐々に成長してゆくと考えられる。せめてキャンプの期間中は、このような態度で子どもに接したいものである。

筑波大学 教授 坂本 昭裕





謝 辞



直江津海岸から妙高の山へ100km歩き抜くという高い目標を掲げ、参加者が覚悟して臨んだチャレンジキャンプ9日間。一人一人が自分をしっかりと見つめ、グループの仲間と関わり、協力しながら課題に立ち向かい、最後まで挑戦し続けやり抜きました。まさに、仲間と共に「自分の一歩」を踏み出した9日間でした。

出合いのステージと協力のステージでは、猛暑の中、上り道を歩き続けるという過酷な体験に挑戦しました。自分の目標をもち、何か困難なことや迷いが生じた時にグループのメンバーで相談し、判断し、決断して行動に移すということを繰り返していきました。参加した子供たちは、想像していたよりも暑さに負けないで、時々観察に行くといつも元気な明るい姿を見せてくれました。それは、めあて設定とグループ内で「同じ目標に向かってがんばる仲間がいてくれる。苦しくても支えてくれる仲間がいる」という言わば安心感を生む「安全基地」のようなものが子供たちのキャンプ生活の中にあっただからだと思います。

挑戦のステージの火打山、妙高山登山は悪天候により、妙高山登山を中止し、コース変更の判断をしました。挑戦意欲に影響が出ないか心配しましたが、子供たちは互いに協力し、定められた課題に向かってがんばり抜きました。

未来につなげるステージでは、キャンプを通して学んだこと

や成長した自分を振り返る場面を設定しました。ゴールパーティーも企画・実行し、そこで見せた子供たちの達成感に満ちた表情が印象的でした。

仲間と共に踏み出した「自分の一歩」は、人それぞれの差はあるものの、一人一人に自己肯定感が育まれたと思いますし、今後の子供たちの人生により影響を与えていくと信じています。

このキャンプを企画・運営・評価するに当たって、国立妙高青少年自然の家運営協議会委員長で妙高市教育委員会顧問の濁川明男様、副委員長で信州大学副学長の平野吉直様、本キャンプを企画段階から評価に至るまで全面的にご指導いただきました筑波大学体育系教授で臨床心理士の坂本昭裕様、また本キャンプの全行程に参加して下さった筑波大学特任助教大友あかね様をはじめ同大学院生の学生スタッフの皆様から多大なるご指導とご支援をいただきました。さらに、本キャンプを実施するにあたり上越市平山町内会様からは、平山キャンプ場の利用につきましてご高配いただきましたし、関係機関・団体・企業の皆様から多くのご支援・ご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

国立妙高青少年自然の家 所長 小林 朋広

チャレンジ キャンプ 2022

報告書



お世話になった皆様

チャレンジキャンプ2022のために、たくさんの関係機関や団体・企業の皆様よりご協力やご協賛をいただきました。皆様からの温かいご支援のおかげで事業が充実し、無事に終了することができました。本当にありがとうございました。

チャレンジキャンプ2022推進委員会 兼 国立妙高青少年自然の家運営協議会委員
平野 吉直（信州大学理事・副学長）
坂本 昭裕（筑波大学体育系教授 臨床心理士）
植木 潤（国際自然環境アウトドア専門学校副校長） ※敬称略

後援

新潟県教育委員会／妙高市教育委員会／上越市教育委員会／糸魚川市教育委員会

協力企業（五十音順）

株式会社 伊藤園／コカ・コーラボトラーズジャパン株式会社／志賀スポーツ／
株式会社 スノーピーク／燕温泉宿 花文／株式会社 橋詰商会／平山キャンプ場／
株式会社 モンベル／やどばーTATSUJI／有限会社 山田損保事務所／LAMP

独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立妙高青少年自然の家

令和4年度 文部科学省委託事業

チャレンジキャンプ2022 ～仲間と共に踏み出す「自分の一歩」～

発行日 令和5年2月

編集・発行者 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立妙高青少年自然の家

印刷所 株式会社 桐朋

お問い合わせ／独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立妙高青少年自然の家

〒949-2235 新潟県妙高市大字関山6323-2

TEL 0255-82-4321【担当：反町】 FAX 0255-82-4325

URL <https://myoko.niye.go.jp/>

スタッフ体制

- スーパーバイザー
坂本 昭裕（筑波大学体育系教授）
大友 あかね（筑波大学体育系特任助教）
- キャンプディレクター
反町 悟
- チーフカウンセラー
池田 果穂
村松 研一
- サブカウンセラー
金谷 洸晟（筑波大学大学院）
堀田 愛（筑波大学大学院）
森山 玖美（筑波大学大学院）

令和4年度 国立妙高青少年自然の家職員

- 所長 小林 朋広
- 次長 室井 修一
- 主幹兼管理係長 佐々木 由香
- 主任企画指導専門職… 鹿島 真由美
- 企画指導専門職… 柏川 敦史
反町 悟
村松 研一
- 企画指導専門職付… 蟹江 真耶
- 事業推進係長… 市村 涉
- 事業推進専門職… 東條 秀大
- 事業推進係… 池田 果穂
成清 裕史
飯吉 陽子
饒村 直美
丸山 信男
吉原 俊美
- 総務係長… 馬場 光雄
- 総務係… 柳田 龍一郎
岡田 芳人
- 管理係… 松本 真也
森田 康博



「体験の風をおこそう」運動

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS



ホームページ



Facebook



Instagram



YouTube